

“すぎる” 構文の語用論的機能に関する一考察

感情濃度と極限語における意味拡張

1. はじめに

近年の日本語において、「最高すぎる」「最低すぎる」といった表現がSNSや口語表現を中心に急速に浸透している。これらは、極限語に対してさらに「～すぎる」を付加する構文的拡張であり、文法的には違和感を伴うが語用論的には感情強度の提示手段として機能している。

2. 先行研究の整理

「～すぎる」構文に関する意味変化（奥津敬一郎, 1998）、評価表現と主観性（前田直子, 2004）、SNS時代の語用論的変容（阿部真也, 2020）などを基礎とし、本研究では「極限語×すぎる」の構文拡張に着目して定量的な検証を行う。

3. 調査方法

Google Custom Search JSON API を用い、「最高」「最低」「最高すぎる」「最低すぎる」について計140件の検索結果を収集。Microsoft Copilot を併用し文献探索・構成支援を実施。分析項目には語彙密度（語数）、感情語スコア（日本語評価極性辞書）、文脈分類を含めた。

4. 結果と考察

「最高すぎる」「最低すぎる」は「最高」「最低」よりも平均語彙数が高く、感情語出現頻度も顕著であった。特に「最低すぎる」には強い自虐的・怒り系語彙が集中しており、“すぎる構文”が感情表出装置として語用論的に機能していることが示された。

5. 結語

本研究は、「～すぎる」構文が主観的リアリティを強調する語用論的装置であることを定量的に示した。今後は会話コーパスによる検証や他極限語との比較分析が期待される。つまり、“最高すぎる”は確かに最高なのだ。